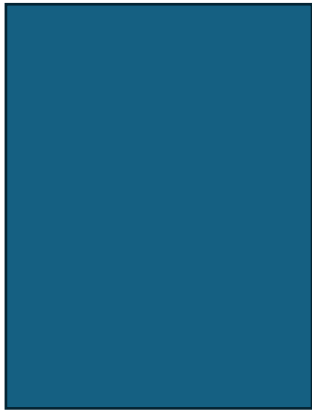


こんなものを読んできた(39.5)

「古事記」(2) 稗田阿礼、太安万侶

校長・鈴木 健

前回、「神武東征」と「ヤマトタケル」の物語が好き、と書いたのに神武天皇だけで行数を使い切ってしまったので、改めて「ヤマトタケル」の物語を紹介します。ヤマトタケルは第12代景行天皇の皇子で本名はヲウスノミコト（一文字目は「を」）、電車のドアの「みすゞ学苑」の広告とは、だいぶイメージの違うバイオレンスな人物です。



ヤマトタケルの物語は、父である景行天皇とヤマトタケルら皇族の食事の場面から始まります。この食事にヲウスノミコト（ヤマトタケル）の兄のオオウスノミコトが欠席します。今でも「同じ釜の飯を食った仲間」と言うように、家族や仲間と一緒に食事をする事には忠誠や団結を確認する意味があります。天皇の食事に皇子が欠席するのは問題なので、天皇はヲウスに「兄貴に丁寧に説教してこい」と言います。ところが5日たってもオオウスが食事に来ないので、天皇はヲウスに「ちゃんとやってきたのか」と聞きます。それに対しヲウスは「ちゃんと殺っておきました」と答えます。

天皇が「どうやったのか」と聞くと、「朝、トイレに入ろうとするとところを捕まえてぶっ殺し、シートでくるんで捨てときました。」と答えました。

景行天皇はドン引きで、こんなヤバい奴は近くに置きたくないと考え、ヲウスを西国の鎮圧に派遣します。ヲウスはそこでも「卑怯上等」で大暴れ、逆らうやつらを皆殺しにし、「ヤマトタケル（ヤマトの強い男）」の称号を得て帰還します。

ヤマトタケルはこんなに頑張ったのだから父親の天皇に褒めてもらえるだろうと思ったのですが、天皇はヤマトタケルを休む間もなく東国に派遣します。この東国遠征では、ヤマトタケルは「父は俺に死ねと考えているのか」と嘆いたり、自分の身代わりとなった妻をしのんで泣いたり、人としての弱さを見せるようになってきます。そして遠征の帰途、伊吹山の悪神を退治しようとして逆に呪いをかけられ、病気になってしまいます。ヤマトタケルはだんだん弱っていく体を押して大和へ帰ろうとしますが、望郷の思いを歌に託して死亡します。

ヤマトタケルは敵を平気でだまし討ちにする凶暴さを持っていますが、同時に父親に認められたいとか妻の死を悲しむとかの感情的な豊かさを持ち合わせた人物です。それが自分の強さを過信して神の呪いを受けて滅びていく様に、哀感と悲劇の美しさがあります。

前回も書いたように、「古事記」や「日本書紀」の神話は、我々の先祖の遺産です。世界の各地の民族が自分たちの物語を持つように、我々の先祖もこの雄渾な物語を残してくれました。これらはただ素直に味わえばいいだけで、それを自分たちの排他的な主張の象徴として勝手に使ったり、逆に現代の価値観から民主主義的でないと批判したりするのは、文化に対する冒瀆です。やめてほしいと思います。